

43 稚児が坂

伝承地：海道町（街道坂）

話者：20 参考書籍：19・20



(稚児が坂)

源頼朝は、鎌倉に拠点を置くと鎌倉から各地方へ通ずる道を整備したが、これらの道はすべて鎌倉街道と呼ばれた。

奥州へ向う鎌倉街道は、宇都宮の北、現在の岩曾町にかかる鎌倉橋周辺で田川を渡り白沢（河内町）方面に向かっていと伝えられている。

この話は、現在、通称白沢街道と呼ばれている県道の本市と河内町とに接する坂にちなんだものである。

源頼朝が本拠地を鎌倉に定め全国に守護・地頭を設置し、いよいよ幕府を開く前年の建久2年（1191）、伊沢家景は、鎌倉の頼朝にかわって、陸奥の国（東北地方）を治める奥州総奉行に任ぜられました。

家景は、多くの部下とともに、妻とさくら姫ときく丸という幼な子を連れて鎌倉をたち、奥州をめざしました。

宇都宮までくると、元気だったきく丸が、急に熱を出し苦しみをうったえましたが、暑さ負けだろうと思い先を急ぐことになりました。

よく朝、一行は宇都宮の宿をたち、鎌倉坂をすぎ、川俣を通り、街道坂（現在の白沢、高崎製紙工場前）にさしかかるころには、きく丸の熱はあがるばかりで、苦しきのため、息もできないほどになりました。

家景をはじめ、部下の侍たちの心配は、ひととおりではありません。近くの清水で頭をひやしたり、手ぬぐいで身体の汗をふき、薬を与えるなど、できるかぎりの介抱をしましたが、病気は一向によくなりませんでした。

そこで、家景と母親のやなぎ御前は、將軍頼朝がとくに深く信仰していた箱根権現のご利益にすがするために一心に祈りましたが、ききめはありませんでした。一同の手あつかんごのかいもなく、ついに、幼い命をおとしてしまいました。

家景をはじめ一同の悲しみは、ひととおりではなく、近くの村人たちも、あまりのあわれさのため声も出ませんでした。

あくる日、きく丸のなきがらは、街道坂の上にほうむられ、鎌倉からいっしょに来た供の者たちや、里人たちによって、厚く供養されました。

一行は、うしろがみをひかれる思いで、任地に向けて旅立ちました。

里の人達も、このことに深く心を痛め、だれ言うもなく、きく丸の死んだ街道坂を「稚児が坂」と呼ぶようになったとのこと。

